

沼津市若山牧水記念館

第67号 令和3年9月1日

編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 <http://web.thn.jp/bokusui/>

わか竹にもずとまりをり珍しき

夏のすがたをけふ見つるかも 牧水

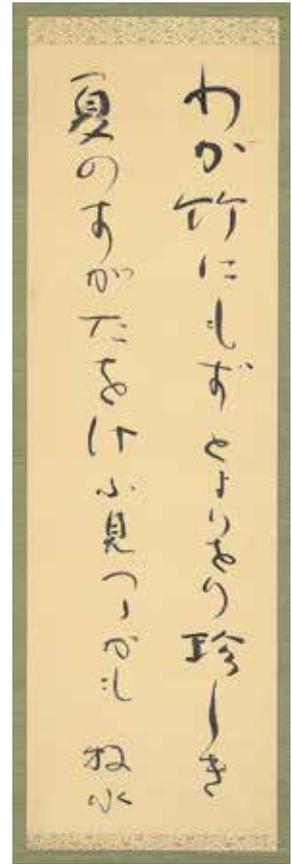
牧水の没後に刊行された第十五歌集『黒松』に収められた「夏日雑詠」七首のうちの一（夏の百舌鳥）という小題のついた三首のうちの一詩である。普通の大きさの半折よりも十センチほど幅の広い絹本に丁寧に書かれた作品である。なお、この短歌の初出は、『創作』大正十三年八月号で、大正十三年夏の作である。他の二首は、

夏深みこのころ啼かぬ百舌鳥の鳥ひそやかにして餌をあさるあはれ

若竹の小枝にをりてあらはなる百舌鳥見つとおもふ雛にしあるらし

日向市の若山牧水記念文学館の伊藤一彦館長は、『命の碎片』で、「わか竹にもずとまりをり…」の短歌について、次のように解説している。

若竹は今年竹とも言い、春の筍が皮をはぎながら成長し、夏に入って竹らしい姿になったものを言う。その



若竹に早くも秋の鳥である百舌鳥がとまっているのをめずらしいと思いい詠んだ歌である。季節に敏感だった牧水らしい作である。この百舌鳥は雛鳥だったらしい。

大正十三年の牧水は、三月八日に長男旅人を伴い、長崎の社友中村三郎の追悼会に出席し、宮崎県東郷町坪谷の生家へ帰郷して、四月十二日に父立蔵

の十三回忌法要を営んだ。その後、母マキを伴って、四月二十三日に沼津へ戻った。母マキは、伊豆の長岡、船原、吉奈の各温泉に遊び、一ヶ月ほど沼津に滞在して坪谷へ帰った。

ところで、牧水が坪谷へ帰郷している間に、沼津では、借家の「香貫の家」を家主に返さなければならぬ事態になっていた。牧水は、母マキをもてなしながら、新たな借家探しに奔走した。六月初め、千本松原近くに新築中の家を見つけて借りることにした。しかし、七月初めに次女真木子が肋膜炎と肺炎を併発してかなりの重症になり、牧水は妻喜志子と二人で昼夜の区別なく看病をした。そして八月に大急ぎで引っ越したが、壁の上塗りが未完成で、畳も入っていないという状態だった。しかも、部屋数が女中部屋を除いて三間しかなく、その三間を書齋、編輯室、茶の間などに使わなければならないため、惨憺たる気持ちだったようだ。また、前年の関東大震災で中断した「揮毫頒布会」の再開など、落ち着かない日々が続いていた。そのような状況でも、牧水は、季節の変化に敏感に感じ取った短歌を詠んでいる。

『黒松』の表現にふれて 馬場 あき子

今年、沼津牧水会の「雛の歌会」に招かれたのは三月十三日だった。その帰りに林茂樹さんの案内する車で久しぶりに牧水記念館に寄せて頂いた。コロナ籠りがつづいていた私にとって、記念館へと向かう黒松林の道は何にもたとえがたい清涼感をもった風土のもてなしだった。この先には千本松原が広がるのだと思うと、いやでも牧水の晩年への思いが湧きあがる。

牧水と自然とのかかわりは、その人生の変転にしたがい微妙な変化をみせつつ魅力的だ。旅の歌人といわれる牧水の前に現れる自然は、移動にともなう地域の変化のままに、自然とともにある人々のくらしや、人情味を含み、自然に抱かれ、自然にまみれて生きるくらしのやさしさに充分みたまされている。

しかし、黒松の林の道を抜けながら思う四十代に入った牧水の自然はどうだったのか。没後、遺歌集として刊行された『黒松』にある自然は、どちらかというと牧水の方が自然の姿に眼を近づけてうたっている面白さがある。

る。しかもそこには従来にない表現の魅力も生まれているのである。「沼津千本松原」の一連をみよう。

樂しげの鳥のさまかも羽根に腹に白々と
冬日あびてあそべる

茂りあふ松の葉かげにこもりたる日ざし
は冬のむらさきにして

鴨の鳥なきかはしたる松原の下草は枯れ
てみそさざいの声

時雨すぎし松の林の下草になびきまつは
れる冬の日の霽

この森の木々に実ぞある実を啄むと群れ
たる鳥の啼く音こもれり

千本松原には雑木まじりの奥の深さがあり、そこは小禽たちの樂園である。五首目をみると「この森の木々に実ぞある」という。いろいろな雑木が、それぞれの実をつけているのだ。そして、それぞれの木の実を好むさまざまな鳥の声が満足そうな鳴き声を籠り声に発しながら群れている。争わず好みを分け合っ

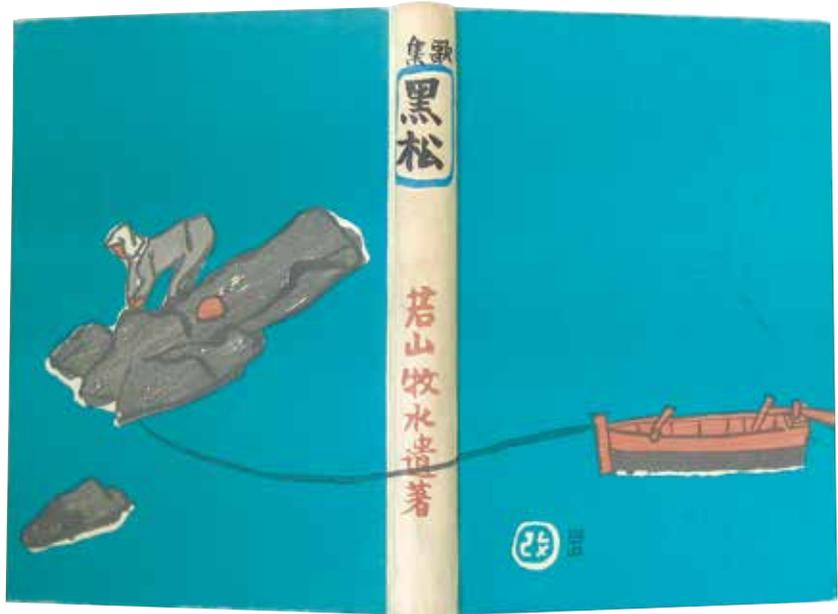
ている和合の声である。「木々に実ぞある」はさりげない表現だが、森の木と鳥の関係を知る牧水でなければ出なかつた言葉であろう。また三首目にも注目する。秋のうち松原の梢々を飛びまわって鳴き交わっていた鴨鳥の声がいつしか消えて、下草は枯れ、冬鳥の季節になったのだ。そして、小さい小さいみそさざいが、その下草の土にこぼれた小さな実などを啄みに来ているのである。そしてまた、牧水はこの頃、穏やかな冬日ざしの微妙さに注目し、表現にも努力している。

第二首では繁り松に籠る日ざしを「冬のむらさき」と、冬にしかない色として表現しているが、他の場面でも冬日の独特の明るい温気を注視しつつ次のようにもうたっている。

庭木々の落葉しはてしのみにあらぬほの
明るさを冬は持つなる

冬が持つこの明るさは揺れず移らずただ
ひとところに籠る明るさ

穏やかな冬日ざしの魅力は、単に落葉によってもたらされた空間の明るみというだけではないふしぎなぬくもりをもっている。その冬のみにあるぬくもりこそ「揺れず移らずただひとところに籠る明るさ」が内包するものなのであり、冬の「ほの明るさ」であり、そ



の陰影としての「冬のむらさき」なのだろう。このように一つのことしめしに執し、言葉を足りるだけ足して自分の感じに近い表現を探ろうとする執着が、旅の自然を詠む時の歌とはちよつとちがった方法を生んでいるのを見る。

微妙である。牧水はこの霽の動きを面白く思っている。それが「なびき」「まつわる」という感覚的な二倍の連鎖によって生まれる情緒の力ともなっていることに注目したい。写真とは別の動的表現である。

千本松原の歌としてあげた第一首に目を戻すと、「樂しげの鳥のさまかも羽根に腹に白々と冬日あびてあそべる」という。この「羽根に腹に白々と冬日あびて」というあたりは、腹の白い小禽が喜々と身をこまやかにこまかにこまかに遊んでいる動きが見えるように伝わるところである。

これもはじめにあげた第四首目の歌だが、「時雨すぎし松の林の下草になびきまつはれる冬の日の霽」という。その下旬に注目したい。「下草」は樹木の裾に叢をくさむらなしている雑草でよく目にして風景だが、その下草に這い寄るように迫る霽のすがたを丁寧ていねいにうたっている。「なびきまつはれる」は、ゆるく低く動く霽の動きである。霧は立ちのぼるものだが、霽は低くまつわる動きを寄るように這いまつわる霽の動きは

ゆつくり見てゆくと「黒松」の自然はまだまだ面白い。

わが袖の触れつつ落つる路ばたの薄すすきの霜は音立てにけり
黒松の老木おいきのうれぞ静かなる風吹けば吹き雨ふれば降り
茂りあひてかたみに木々が落したる木洩こもれ
日匂ひげひけふは元日
曙のものあけぼののしめりの深ければ芽ぶける
木々の立ちて静けき

はじめの歌は寒さのきびしい霜の朝のことだ。枯れすすきも白い霜でおおわれている。そのすすきに袖触れるとばらばらと落ち散る霜の音がしたという。「薄の霜は」とクローズアップされながら「音たてにけり」と結はれているので、かなり大きな音のように聞こえるが、牧水は軽くかわいた霜の粒の音を面白く思っているのだろう。しかし、表現としては結句に据えられると異様感が生れ、きびしい寒気の面白さとなってくるのだ。

二首目の歌は剛毅ごうぎな黒松の老木の表情だが、晩年の牧水はことに小さきまぎまな自然のたすまいの根本に「静か」な底力を感じるよろこびを持つているようだ。この歌も掛り結びの三句切である。そのために強い断言の



『黒松』の口絵に使われた最後の旅姿（昭和3年5月）

ひびきをもつ。そして下句が独特だ。ふつう
 こういうフレーズは「風吹かば吹け雨降らば
 降れ」と仮定形で使われるのが普通だが、牧
 水の下旬では仮定の条件ではない。少し異様
 な語法だが、風は吹いている。雨も降ってい
 る。そうした現実の条件をすべて受け入れて
 黒松の梢はびくともせず、しかも鎮静な表情
 を変えていないのである。

ついでにもう一つ、四首目の「静けき」木
 のたたずまいを見よう。ここでは、「曙」とい
 う時刻の条件がつく。春である。春暁の豊か
 なしめり気は大地をうるおし、木々をうるお
 す。そのたっぷりした生氣の中で芽吹く木々

が落したる木洩日」がある。木々が葉を落す
 のではなく、木々はそれぞれにつくり出した
 木洩日を落しているのだ。擬人表現を用いた
 やさしさが加わることによって何というやさ
 しく穏しい景となったことか。それをいとし
 く見つめている牧水の気分には、「匂」うとい
 う言葉が生れているのである。「匂」うとは
 単一の美意識ではない。元日という特別な日
 の気分と、木々の「かたみ（互い）」の営為
 を思う牧水の心が混交しあって生まれた馥
 郁とした気分なのだ。

『黒松』の自然はひと味ちがった魅力をも
 つているといえるだろう。

がある。これから伸びるその
 生命力の静かな気配を「静け
 き」と結んでいる。「新鮮」
 でもなく「きらきらしさ」で
 もなく、「しめりの深ければ」
 という恵みを受けて地に立つ
 木の「静けき」表情に、牧水
 は言いたいほどの信頼を寄
 せているのだ。

言い残した三首目の歌は面
 白い歌だ。木々は茂り合つて
 枝葉を密に交えあつている。
 そうした中で「かたみに木々

『筆者プロフィール』 ばば あきこ

歌人、評論家。昭和三年東京都生まれ。昭和二十二
 年「まひる野」入会、窪田章一郎に師事。また、喜多
 流宗家入門。日本女子専門学校（現昭和女子大）卒
 中学校・高等学校教員を経験。同五十三年「かりん」
 創刊、以後ずっと発行。古典や能に対する造詣が深く、
 新作能の制作も行っている。同五十五年、朝日歌壇の
 選者となり現在も続けている。

歌集に『早笛』『無限花序』『桜花伝承』『葡萄唐草』
 『月華の節』『阿古父』『飛種』『鶴かへらず』『舟のや
 うな葉』『記憶の森の時間』等がある。

評論に『式子内親王』『鬼の研究』『修羅と艶 能の
 深層美』『歌枕をたずねて』『和泉式部』『風姿花伝』『歌
 説話の世界』等がある。

逍空賞、詩歌文学館賞、読売文学賞、毎日芸術賞、
 朝日賞、紫式部文学賞、前川佐美雄賞等を受賞され、
 紫綬褒章、旭日中綬章を受章されている。

本年三月に開催した第三十三回「雛の歌会」に、講
 師としてお越しいただいた。

